フランス革命のセクシュアリテ

小井高志

ご存知サド侯爵は、一七四〇年に生まれ、成人して結婚したのち、様々な「性的奇行」、放蕩、性犯罪のために、生涯の大半を獄中で過ごした。没したのは一八一四年である。その間に彼は『ジュスティーヌ、または美徳の不幸』や『ジュリエットのはなし、または悪徳の栄え』など幾多の「名作」をのこしたことは良く知られている。それらの作品は、まさしくフランス革命とナポレオン・ボナパルトの時代に書かれたもので、当然、フランス革命との関わりを無視することはできない。サドは、ロベスピエールやカミーユ・デムーランと同じ、フランス最高のエリート校ルイ・ル・グラン学院の出身である。また一七八九年七月一四日には彼はバスティーユに収監されていたという俗説もあるが、そのとき彼はヴァンセンヌ牢獄にいた。しかしサドは出獄後、パリのピック地区（ロベスピエールの地区）のミリタンとなり、地区集会の議長や書記も努めた。ジャコバン独裁期には逮捕され、死刑を宣告されたこともあった。

サドは革命をどのように受けとめていたのであろうか。それについてアメリカの女流フランス革命史家リン・ハントの誠に興味深い著書『フランス革命と家族ロマンス』（平凡社刊）が最近訳出されたので、

彼女の「フランス革命と私生活」（Ariès, P. et Duby, G., 《Histoire de la vie privée》1987, Paris. 所収）のなかにあることも含め、彼女のサド論を紹介したい。

ハントによると、フランス革命は、（国王）ルイ十六世の処刑をもって、王国民の父たる「抑圧的専制的な父」を抹殺した。かわって、父親の特権を否定して自由な個人の結合からなる家族を構成し、離婚も認めた。そしてすべての市民（それに当然女性も含まれる）の自由と平等を宣言した。にもかかわらず、革命家たちは女性を政治と公的活動から排除し、家庭に閉じ込めようとしたのであった。ところがそれとは反対に、革命期にはきわめて例外的なことながら、むしろ女性を公的存在にすることを主張した人物がいた。サドである。女性の身体は公のため、すべての男性の求めに応ずべく作られているのだから、女性を私的領域に止めず、公的に委ねるべきである、とサドは考え、公娼制度の創設を唱えた。さらに近親相姦や男色も肯定し、男女の差異解消や性差喪失を認める立場をとった。またサドは、革命家と同じ啓蒙思想に関わる諸概念、自然とか、理性とか、自由とかなどの概念から出発しながら、革命家たちとは全く異なる結論へ導かれていった。性の革命とか、エロスの権利宣言、悪徳の称揚などがそれにあたる。彼の小説のなかには、「憲法の友の会」（ジャコバン・クラブ）を捩（もじ）った「犯罪の友の会」がでてくるのも、フランス革命との関係を考えるうえで誠に意味深い。しかしサドの考える女性は、男性の性的奴隷であり、結局サドの理想社会は、閉ざされた閨房（けいぼう）のなかでしか実現されない反社会的なものであった、とハントは結論している。

ハントによると、革命当時サドのこの奇妙な理論に賛成する者など殆どいなかっただろうが、彼の著作

は読者の関心をひき、幾版も重ねていった。そのことからも、サドの理想は案外、当時の多くの男性の女性観を象徴するものであったのではないか、とハントはみている。サドというのは、フランス革命というコインの裏面にあたると言っても良いであろう。このコインの裏側から、サドのきわめてユニークな思想から、逆にフランス革命の深層を明らかにしうるということを教えられた。今後改めて、フランス革命の見地からサドの全集を読んでみたい。

ところで右記の訳書のなかで、ハントは、マリ・アントワネットの裁判と彼女を題材にしたポルノ小説の分析もしている。ルイの裁判は政治的犯罪に限定されていたのに、何故彼女の裁判の方には、個人的な性的ポルノ的中傷が満ちているのか。王妃は、肉体を性的に用いることにより政治を腐敗させたかどで裁かれたのであり、さらに王妃という公的存在自体が、女性を私的領域に閉じ込めようとした革命家たちに不安を与えたのではないか。彼女に対する近親相姦の告発やレスビアニスムの非難は、男女の差異解消や性差喪失の懸念からきているのではないか、とハントは解釈する。

それにしても王妃に対する性的誹謗中傷、ポルノ文学の流行、近親相姦、サディスムといったテーマは、ハントの言うところでは、人を元気づけるようなものではない。勿論これまでのフランス革命史研究にはなかったテーマである。それにジェンダーやフェミニスムのことも含め、そのような研究は、革命を美化することから比較的自由な、革命の現実を客観的に直視しうる外国人で、しかも女性であるハントのような研究者にしてはじめて可能ではなかったか。巨匠たちによる長い伝統を誇るフランス革命史研究でも、今や第三共和制(現在の第五共和制もその延長線上にある)のイデオロギーの枠を越えた新しい革命像(そ

フランス革命のセクシュアリテ（小井）

れは必ずしも立派で理想的な、人びとを鼓舞するようなものでないとしても）が生みだされつつあるように思われる。それに寧ろフランス外の外国人研究者が大きな役割を果たしていることも、日本のフランス史研究者として感慨深い。

（本学史学会会員）